

桂林莊雜詠諸生に示す（その一） 広瀬淡窓

道ことを 休めよ 他郷 苦辛 多しと

同袍 友 有り 自ら 相 親しむ

柴扉 曉に 出ずれば 霜 雪の 如し

君は 川流を 汲め 我は 薪を 拾わん

休道他郷多苦辛 同袍有友自相親

柴扉曉出霜如雪 君汲川流我拾薪

解説 桂林莊時代の作品で、ともに暮らし、ともに学ぶ喜び、楽しみを、冬の朝の炊事のしたくの一こまにとらえたもの。

語釈 ※休道ⅡⅡと言うな。※同袍Ⅱ抱は着物の事。着物を共にするほどの仲のよい間柄であるとの意。親しい友のこと。※柴扉Ⅱ柴のとびら。

通釈 他郷へ出て勉強するのはつらい、などと言いたもうな。着物をともにする友もでき、仲よく暮らすようになるのだ。朝早く、柴の扉を開けて外に出れば、雪のように霜が降りている。さあ炊事の仕度だ。君は川の水を汲みに行きたまえ、僕は薪を取りに行こう。